

英語コーパス学会第26回大会

ワークショップ《語彙分析入門：lemma リストの作成》

10:15～11:45 (9:45 受付開始)

会場：昭和女子大学 80 年館 6 階 C・D 教室

講師：中條 清美（日本大学）・内山 将夫（情報通信研究機構）

定員：先着 48 名 参加費：会員無料・非会員 1,000 円（申し込みは電子メール・郵便で事務局まで）

日時 2005 年 10 月 22 日(土)

会場 昭和女子大学 80 年館 6 階オーロラホール

(〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7 <http://www.swu.ac.jp/swu.html>)

[渋谷駅から東急田園都市線で 2 つ目「三軒茶屋」駅下車、南出口より徒歩 5 分]

受付開始 12:00

開 会 13:00

1. 会長挨拶
2. 開催校挨拶
3. 学会賞授与式
4. 事務局からの連絡

司 会 赤野 一郎（京都外国語大学）
中村 純作（立命館大学）
池上 嘉彦（昭和女子大学）

司 会 西村公正（関西外国語大学短期大学部）

研究発表 1 13:35～14:05

コーパスを用いた英語「誤用」研究—英語母語話者による「誤用」の使用と地域差—

石部 尚登（大阪大学大学院生）

研究発表 2 14:10～14:40

動詞“feel”の用法—学習者コーパスと母語話者コーパスを用いた比較分析—

小林多佳子（昭和女子大学）

休 憩 14:40～14:55

司 会 久保田俊彦（明治大学）

研究発表 3 14:55～15:25

意味重視・量重視・総合的指導の 3 指導法が高校生ライティングに及ぼす影響

磐崎 弘貞（筑波大学）

研究発表 4 15:30～16:00

日本人大学生による英語接続語句の使用に関する研究

成田 真澄（東京国際大学）

杉浦 正利（名古屋大学）

休 憩 16:00～16:20

特別講演 16:20～18:00

Planning, Creating, and Analyzing ‘Small and Beautiful’ Corpora: The Story of the International Corpus of English

司 会 中村 純作（立命館大学）

講 師 Charles F. Meyer

(University of Massachusetts Boston)

閉会の辞

金子 朝子（昭和女子大学）

《懇親会 時間：18:15～20:15 場所：レストランプレリュード 会費：4,000 円》

英語コーパス学会 (Japan Association for English Corpus Studies)

会長 中村純作 事務局 615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学 赤野一郎研究室

TEL: 075-322-6103 E-mail: i_akano@kufs.ac.jp 郵便振替口座 00940-5-250586

URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html>

- ◆ 大会当日、入会受付もいたしますので、お誘い合わせの上ご参加下さい（年会費 一般 5,000 円 学生 3,000 円）。
- ◆ 「当日会員」としての参加も受け付けております（1,000 円）。

英語コーパス学会 第 26 回大会資料

日時:2005 年 10 月 22 日(土)午後 1 時より(正午受付開始)

会場:昭和女子大学 80 年館 6 階オーロラホール

(<http://www.swu.ac.jp/swu.html>)

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7

第 26 回大会プログラム

ワークショップ	10:15～11:45 (9:45 受付開始)	80 年館 6 階 C・D 教室
《語彙分析入門：lemma リストの作成》	講師 中條 清美 (日本大学)	内山 将夫 (情報通信研究機構)

会 場 80 年館 6 階オーロラホール
受付開始 12:00
開 会 13:00

会長挨拶
開催校挨拶
学会賞授与式
事務局からの連絡

司会 赤野 一郎 (京都外国語大学)
中村 純作 (立命館大学)
池上 嘉彦 (昭和女子大学)

司会 西村 公正 (関西外国語大学短期大学部)

研究発表 1 13:35～14:05

コーパスを用いた英語「誤用」研究—英語母語話者による「誤用」の使用と地域差—
石部 尚登 (大阪大学大学院生)

研究発表 2 14:10～14:40

動詞“feel”の用法—学習者コーパスと母語話者コーパスを用いた比較分析—
小林 多佳子 (昭和女子大学)

休憩 14:40～14:55

司会 久保田 俊彦 (明治大学)

研究発表 3 14:55～15:25

意味重視・量重視・総合的指導の 3 指導法が高校生ライティングに及ぼす影響
磐崎 弘貞 (筑波大学)

研究発表 4 15:30～16:00

日本人大学生による英語接続語句の使用に関する研究

成田 真澄 (東京国際大学)
杉浦 正利 (名古屋大学)

休憩 16:00～16:20

特別講演 16:20～18:00

司会 中村 純作 (立命館大学)

Planning, Creating, and Analyzing ‘Small and Beautiful’ Corpora: The Story of the International Corpus of English

Charles F. Meyer
(University of Massachusetts Boston)

閉会の辞

金子 朝子 (昭和女子大学)

懇親会 18:15～20:15

《レストランプレリュード 会費：4,000 円》

発 表 要 旨

【ワークショップ】

語彙分析入門：lemma リストの作成

中條 清美（日本大学）

内山 将夫（情報通信研究機構）

あるコーパスの特徴を観察する方法の 1 つとして、そのコーパスから作成した語彙リストを単独で、あるいは他のコーパスの語彙リストと比較する方法がある。語彙リストを簡便に作成する手法としては、WordSmith Tools 等のソフトが普及している。しかしこのようなソフトの 1 回の操作で作成できる語彙リストは、「スペースで区切られた文字列」を 1 語と数える word-forms で構成されており、boy, boys や come, comes, came はすべて異なる語として分類される。一方、我々が直感的に考える語彙リストは、辞書の見出し語のように、come と言えば、come, comes, coming, came を含むものである。この come は一般に lemma (レマ) と呼ばれる。実際、英語教育分野において公表されている学習用語彙リストの多くは lemma リストである。したがって、WordSmith 等のツールにより作成された word-forms リストを、公表されている語彙リストと比較するためには、word-forms リストから lemma リストを作成する lemmatization が必要となる。

“Lemmatization looks fairly straightforward, but is actually a matter of subjective judgement by the researcher. There are thousands of decisions to be taken.” という Sinclair (1991:41) の引用が語るように、lemma リストの作成は、語の定義とからむ多くの主観的判断を必要とする。語の定義がゆれると正確な比較に基づく信頼できる結果が得られないため、lemmatization は語彙研究上のバリアの 1 つとなっている。

本ワークショップは、前半に語彙分析における語の数え方について、その現状と定義についての比較検討を試み、後半の hands-on session では、Windows ユーザーを対象に、Knoppix（産業技術総合研究所より公開されている CD-ROM で起動する Linux）を使って、lemma リストを実際に作成する予定である。事前知識として、『英語コーパス言語学』（齊藤他 2005）第 6 章前半を参照されたい。

【研究発表 1】

コーパスを用いた英語「誤用」研究 —英語母語話者による「誤用」の使用と地域差—

石部 尚登（大阪大学大学院生）

本研究の目的は、コーパスの分析を通して、英語の「誤用」の使用と地域差との関係を明らかにすることにある（ただし、本研究では「誤用」を「規範や文法など様々なレベルにおける期待への違背」というように広く捉える）。

これまで、いわゆる「誤用」に関しては、その制定基準の曖昧さ、恣意性、非論理性が指摘されてはきた。しかし、その実際の使用が直接考察の対象とされることはほとんどなかった（『誤用の文法』という試みがあったが、それは「言語変異のメカニズムの解明」を目指すものであ

り、またあくまで散発的なものであった)。

また、学習者コーパスを用いた英語学習者の「エラー」分析が近年盛んに行われてはいるが、その対象は主として非母語話者の英語である。しかし実際には、BNCで「～とは異なる」という意味の“differ to”の使用が複数確認できるように、母語話者の英語にも「誤用」が見られる。これが本研究の対象となる。

実際の分析は、一連の地域英語諸コーパス (Brown, LOB 等)を主に用い、言語現象を扱う視点の異なる Berry (1971)と Fitikides (2000)、および荒木 (1996)で提示される「誤用」に関して、それぞれコーパス中での実際の出現の傾向を見ていく。英語の言語間的な権力性は「英語帝国主義論」などで語られてきたが、本研究で得られる「誤用」の特性によって、英語の言語内的な階層性を明らかにすることが可能となる。

【研究発表2】

動詞 “feel” の用法

—学習者コーパスと母語話者コーパスを用いた比較分析—

小林 多佳子 (昭和女子大学)

本発表は、すべての言語には形を変えていても感情を現す “feel” に対応する表現が存在するという Wierzbicka (1999)の主張に注目し、国際口語学習者コーパス作成プロジェクト (LINDSEI)において収集されたデータの一部を利用して、日本語、中国語、イタリア語、フランス語という四つの異なる言語背景を持つ英語学習者コーパスにおける動詞 “feel” の用法を調べ、学習者グループ間に特徴的な違いが見られるのか検証する。さらに、2つの英語母語話者コーパス、The London-Lund Corpus (LLC)と The Wellington Corpus of Spoken New Zealand English (WSC)を用いて、英語学習者コーパスとの比較分析を試みる。

研究方法としては、動詞 “feel” の用法を意味領域で分類したのち、WordSmith Tools を使用して、上記6つのコーパスでコンコーダンス・ラインに出現した “feel” の全例を精査する。さらに各コーパスにおける、それぞれの意味領域の頻度と比率を調べ、“feel” との共起関係も含めた各コーパスの特徴の比較分析を行なう。この分析結果に基づき、日本語、中国語、イタリア語、フランス語という4つの母語を背景とした英語学習者コーパスにおいて、動詞 “feel” の用法にはそれぞれ固有の傾向が認められる一方、比較的高い確率で “feel” と共起する語は全般的に類似した傾向にあること、さらに動詞 “feel” の共起語に関して2つの英語母語話者コーパスとは異なる特徴を示すことなどを論じる。

【研究発表3】

意味重視・量重視・総合的指導の3指導法が

高校生ライティングの語彙力・文法力に及ぼす影響

磐崎 弘貞 (筑波大学)

本研究は、日本人高校生に、以下の3つの異なるコメント方法で英作指導を行い、そのデータをコーパス化した上で、その英作文の質と量にどのような効果が生まれたかを数量的に検証

するものである。

実験方法として、塩川 (1995)、武田 (1999)、Aoki (1999)、Ashwell (2000)を参考・改訂して、以下の3つの英作指導法を設定した。

- (1)文章の一貫性・構成に注意して書かせる指導(「この部分の理由は何ですか」「これはトピックと関連するかな」「まとめの文も書いてみよう」等のコメントを付加)
- (2)量的に多く書くことに注意して書かせる指導(「この点をもっと詳しく書いてみよう」「これについてもっと教えてください」等のコメントを付加)
- (3)読むこと、話すこと、書くことを結びつけた総合的な指導(まず関連対話英文を読み、ペアで書くことを話し合い、その上で書かせる；コメントの方針は(1)と同じ)

被験者として、埼玉県の公立高校2年生4クラス計139名を対象とし、上記3つの指導法別実験群および統制群に分けた。実験に際し、まず被験者には文章構成法の指導をした。その後3ヶ月間、実験群には指定テーマによる3回の自由英作文とその再提出、計6回の英作を課した。その前後に行ったプリテスト英作文・ポストテスト英作文を含めて、被験者の全ての産出英文をコーパス化した。

これについて、語彙の豊富さ (type-token ratio 他)・文法の正確さ (error-free clauses 他)・複雑さ (sentence complexity ratio 他)・流暢さ(t-unit length 他)の観点、計12項目の尺度から、被験者の英作文の質・量にどのような変化があったかを発表するものである。

【研究発表4】

日本人大学生による英語接続語句の使用に関する研究

成田真澄 (東京国際大学)
杉浦正利 (名古屋大学)

近年、上級レベルの英語学習者による接続語句の使用を、英語母語話者による使用と比較分析する研究が盛んに行われている。特に、様々な母語を有する英語学習者を対象として、ベルギーのICLE (International Corpus of Learner English)プロジェクトで構築された学習者コーパスとLOCNESS (Louvain Corpus of Native English Essays)と呼ばれる英語母語話者コーパスを用いた量的分析が進められている。

本研究では、ICLEプロジェクトのサブ・コーパスとして昭和女子大学で構築された日本人大学生(144人の大学3・4年生)の学習者コーパスと英語母語話者コーパスLOCNESSを用いて、日本人大学生による英語の接続語句の使用実態を調査する。調査対象とした接続語句は、文法書Quirk et al. (1985)とBiber et al. (1999)に基づいて選択した25個の語句で、(1)結果／帰結、(2)対比／譲歩／逆接、(3)例示／言い換え、(4)列挙／追加という4種類の意味的役割に分類される。コーパスにおけるこれらの語句の使用頻度と文中における使用位置(文頭・文中・文末のいずれの位置で使用されているか)を量的に分析した結果、日本人英語学習者は英語母語話者と比べて接続語句を過剰使用する傾向にあり、しかも文頭の位置に多用することがわかった。

さらに、上記学習者コーパスの中から接続語句の多用が顕著な学習者データを選び、英語を母語とするEFLの専門家に、使用されている接続語句の適切性を評価してもらった結果を報告する。こうした量的・質的両面からの分析に基づき、日本人英語学習者が英語の接続語句に関しどのような知識を持っているのか、接続語句の指導法を改善する必要があるのかを考察する。

【特別講演】

Planning, Creating, and Analyzing ‘Small and Beautiful’ Corpora:
The Story of the International Corpus of English

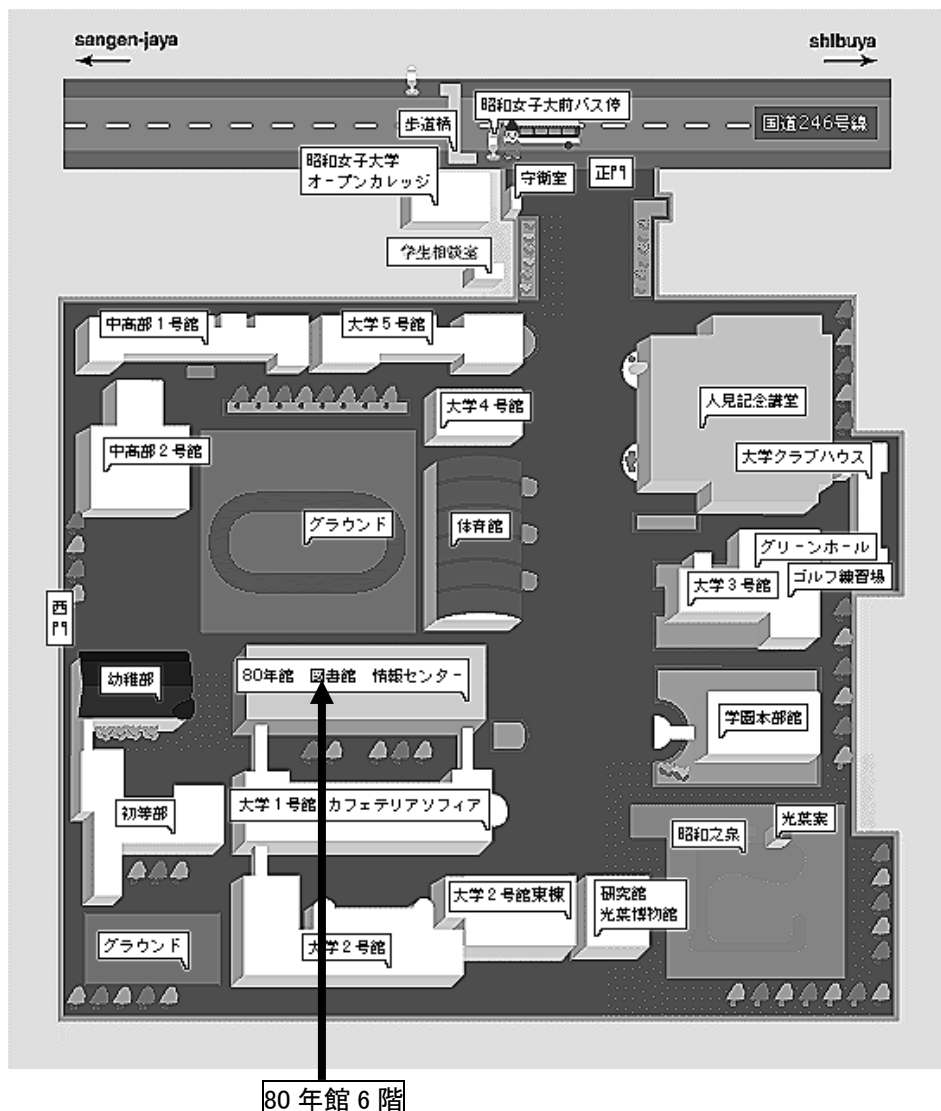
Charles F. Meyer (University of Massachusetts Boston)

The International Corpus of English (ICE) is one of a number of first generation corpora that are sometimes described as ‘small and beautiful’: ‘small’ because they are much shorter than the British National Corpus or the Bank of English Corpus, ‘beautiful’ because many have come to realize that a lengthier corpus is not necessarily a better corpus. In my presentation, I will explore the strengths and limitations of smaller, carefully planned corpora such as ICE. I will first of all provide an overview of ICE, discussing and evaluating some of the methodological issues that governed the planning and creation of ICE. I will then report the results of two analyses of ICE that I have conducted. The first analysis investigated the distribution of pseudo titles (e.g. *Yankee outfielder* in the construction *Yankee outfielder Hideki Matsui*) in various ICE components. Pseudo titles are found mainly in press reportage; they are quite common and ordinary in the American press but highly stigmatized in the British press. This study therefore provided a good opportunity to determine whether British or American usage trends predominate in other ICE varieties, and whether a corpus such as ICE is suitable for studying variation among national varieties of English. The second study (conducted with Hongyin Tao of UCLA) focused on the occurrence of so-called gapped coordinations in various genres of the British component of ICE (ICE-GB). Gapped coordinations are relatively rare constructions consisting of a missing verb or predication in the second conjunct of a coordinated construction (e.g. *likes* in the second conjunct of *The child likes hamburgers and his brother [] hot dogs*). This analysis explored whether infrequently occurring linguistic constructions can be validly studied in short corpora containing many different genres. The results of both studies suggest that if one understands the strengths and limitations of shorter corpora, such corpora can be used to make broad generalizations about usage trends and gain insights into infrequently occurring linguistic constructions.

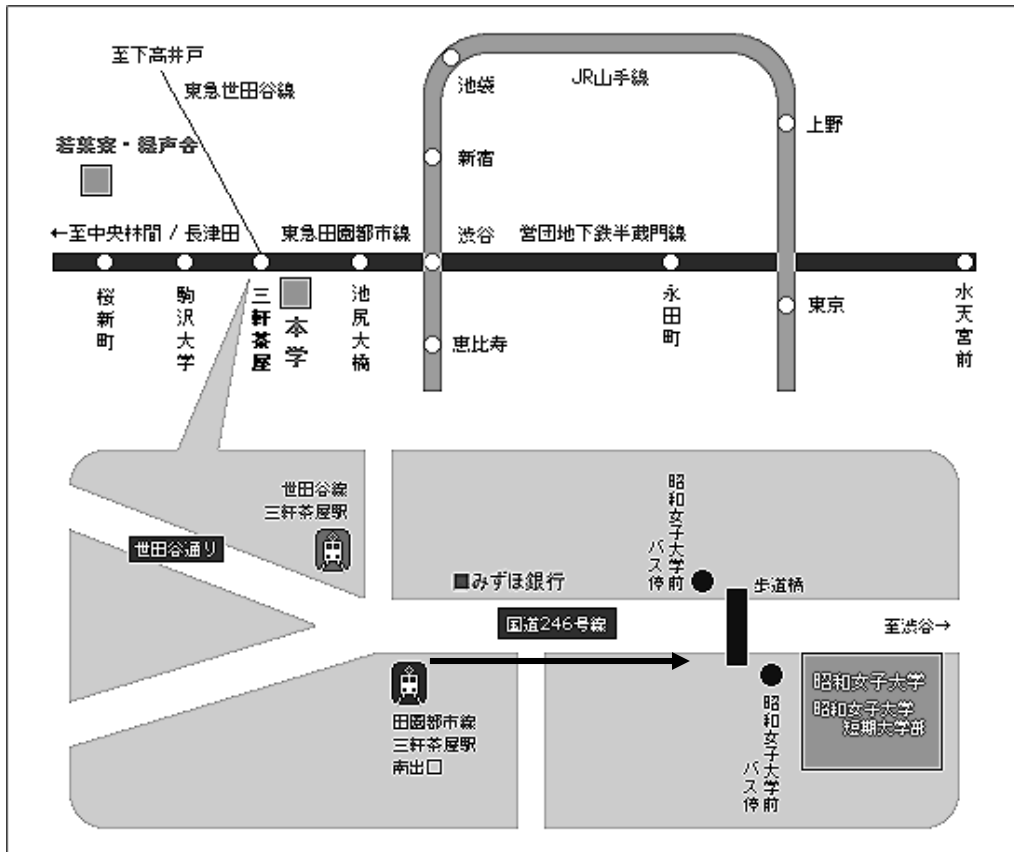
《大会参加者へのご案内》

- 車でのご来場はできません。
- ワークショップの受付は「80年館」6階で午前9時45分から行います。
- 大会の受付は「80年館」6階で正午から行います。
- 昼食につきましては、校内にカフェテリア「ソフィア」がありますが、混み合う時間帯は学生優先となっておりますので、同封のランチマップをご利用いただければ幸いです。
- 校内は分煙措置がとられています。指定場所での喫煙にご協力ください。
- 会員でない方も、「当日会員」として参加していただけます(1,000円)。

昭和女子大学キャンパスマップ



《会場へのアクセス》



地下鉄：渋谷駅から東急田園都市線で2つ目「三軒茶屋」下車、徒歩7～8分

改札口を出て少し進むと左手に「南口」があります。左右に分かれる階段がありますので、左の階段を上がります。国道246号線に出ます(左上に首都高速が見えます)ので、そのまま(渋谷方面に)直進してください。

バス：JR 渋谷バスターミナルより三軒茶屋方向行き、昭和三女子大学前下車

2005年9月6日 発行
 編集・発行 英語コーパス学会
 代表者 中村 純作
 事務局 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6
 京都外国語大学 赤野一郎研究室内
 TEL: 075-322-6103 FAX: 075-322-6246
 E-mail: i_akano@kufs.ac.jp
 URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html>
